

平成30年度

中学生広島派遣事業 報告書



大府市

事業の概要

- 1 目的 次世代を担う若者を被爆地である広島へ「平和大使」として派遣し、原爆ドームや広島平和記念資料館などの施設見学、被爆体験者の講話を聴くなどを通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、同世代の仲間に伝えてもらうことを目的とする。
- 2 期 日 平成30年7月27日（金）～28日（土） 1泊2日
- 3 派遣人数 8名
事務局として、地域福祉課職員2名が随行。
- 4 選出方法 広報おおぶ等で募集し、選考会において生徒8名を選出。
- 5 対象学年 第2学年
- 6 説明会 平成30年7月1日（日） 午前9時30分から
- 7 勉強会 平成30年7月1日（日） 午前10時10分から
平成30年8月14日（火）午前9時30分から
- 8 感想文 報告書として編冊し、平和大使及び中学校へ配布。
市ホームページへ掲載。
- 9 報告会 平成30年9月2日（日） 午前9時30分から
平和大使による体験発表（感想文の朗読など）を行う。
- 10 その他 戦没者追悼式（市主催）において、平和大使の代表者1名による「平和の誓い」の朗読を行う。

日 程

【委嘱状伝達式・事前勉強会】 平成30年7月1日（日）

時間 午前9時30分から12時
場所 市役所2階204会議室 ほか
内容 市長あいさつ、委嘱状伝達、自己紹介、事業説明、
事前勉強会（「戦争体験を語り継ぐ有志の会」による講話、
平和石碑・アオギリ2世の苗木見学、防空壕見学）

【派遣1日目】 平成30年7月27日（金）

8：15 大府駅集合
8：31 大府駅出発
9：13 名古屋駅出発 [のぞみ11号]
11：26 広島駅到着 市電にて平和記念公園へ
～原爆ドーム、原爆の子の像、被爆したアオギリの木、平和記
念資料館、被爆体験講話（平和記念資料館内）～
17：17 平和記念公園出発
17：40 旅館到着

【派遣2日目】 平成30年7月28日（土）

8：45 旅館出発 徒歩にて袋町小学校平和資料館へ
9：00 袋町小学校平和資料館到着 見学後市電にて平和記念公園へ
10：30 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館到着
11：00 平和学習講座受講（国立広島原爆死没者追悼平和祈念館内）
12：10 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館出発 市電にて広島駅へ
13：40 広島駅到着 広島駅構内にて自由行動
13：35 広島駅出発 [のぞみ34号]
16：53 名古屋駅到着
17：31 大府駅到着 解散

【勉強会】 平成30年8月14日（火）

時間 午前9時30分から12時
場所 大府市内
内容 被爆体験者に体験談を聴く、戦争に関する資料の展示会見学

【広島派遣報告会】 平成30年9月2日（日）

時間 午前9時30分から
場所 市役所2階201会議室から204会議室

【戦没者追悼式において「平和の誓い」朗読】 平成30年10月2日（火）

時間 午前9時30分から11時30分
場所 市役所地下多目的ホール

「平和大使」の紹介



山田 陽菜



佐藤 加奈



加藤 駿一



坂野 夏月



式庄 さくら



野村 茉莉香



城 知希



星野 竜馬

(順不同、敬称省略)

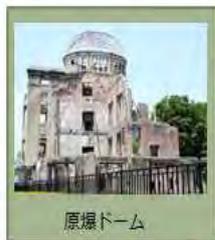
広島での訪問先

7月27日(金)

- ① 原爆ドーム
- ② 平和記念公園
(原爆の子の像、被爆したアオギリの木見学)
- ③ 広島平和記念資料館 (被爆体験譚和)

7月28日(土)

- ④ 袋町小学校平和資料館
- ⑤ 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 (平和学習)



「平和大使」感想文

平和へのかけ橋

大府中学校 山田 陽菜

私は大府市が主催する平和事業の一環である「平和大使」として、7月27日と28日に広島県に行きました。小学生の頃に読んだ「禎子の千羽鶴」という本が忘れられず、どうしても禎子さんがモデルとなった「原爆の子の像」を見たいと思い応募したこの派遣。私は出発前から「ずっと憧れていた場所に行く」とワクワクしていました。

7月27日、この日は原爆ドーム、平和記念公園、広島平和記念資料館の見学と、実際に被爆した方の体験談をききました。その中でも特に心に残ったのは、広島平和記念資料館です。出発前にある程度は覚悟をしていたものの、それでも大きなショックを受けました。原爆が落とされたのは1945年8月6日午前8時15分。上空約600メートルで炸裂し、すさまじい爆風と熱風、そして大量の放射線をまきちらし、罪のない人々の命を一瞬にしてうばい取ってしまいました。その時の爆心地周辺の温度は7,700度ほどだと言われているそうですから、どれほどすさまじかったことでしょうか。また、その時はかろうじて生きのびたものの、何年もたった後に病気になったり、その時はまだ生まれていなかったのに生まれてから病気をかかえる人も多くいたそうです。夏の一日が始まろうとする一瞬をうばいさり、生きのびた人々の命までもジワジワとけずりとっていく、そんな非人道的な出来事に胸がしめつけられる思いでした。資料館には原爆で亡くなった方々の遺品も多く展示されています。どれを見ても、それを持っていた持ち主の事を想像することができました。そして、その遺品からは「どうしてこんな目に・・・」「もっと生きていたい。」「苦しい。助けて。」そんな人間としてあたりまえの、ありのままの感情が伝わってくるようで苦しくなりました。いったい何のための戦争だったのでしょ。いったい誰のための戦争だったのでしょ。口にはできなかつたけれど、だれもが「戦争はいやだ。」そう思っていたはずです。

次の日は、平和学習講座を受けました。講師の方の一つ一つの言葉に重みがあり、もしも自分の身に起こったらと考えるととても怖くなりました。そして、やはり語りつぐことが大切だと思いました。

今回の派遣を通して「平和」は「ある」ものではなく「つくる」ものなのだと強く感じました。今まで私は「今の時代に戦争なんて、平和が大切って言っているけれど、そんなのあたり前じゃん。」とっていました。しかし「今」というこの瞬間は、そういった悲しい出来事の上に成り立っています。自分の周りだけを見れば平和なのかもしれませんが、もっと大きな視野をもてば世界各地で、核兵器を保有していたり、内戦が起きていたり、テロが起きていたり、世界的に平和とは言えません。世界が平和であることはだれもが祈っている事だと思います。ご飯をいっぱい食べられること、学校にいけること、好きな服を着られること、帰るところがあること、ぐっすりねること、普段のあたり前の生活が平和だと感じました。終戦から73年、年々戦争について語る人が少なくなってきました。もう時間がありません。私はこの派遣でとても貴重な体験をしました。私にできる事は広島できいた声なき声を形にする事だと思います。そして、次の世代を担う一人として平和へのかけ橋となり、胸を張って「もう戦争はしません。」そう言いたいです。



平和のリレー

大府中学校 佐藤 加奈

平和、この2文字は、簡単にだれもが口にできる言葉ですが、深い意味があることを、私は、広島で学びました。私は、始めに、原爆ドームを見ました。むき出しになった壁や鉄筋を見て戦争の怖さを知りました。その後原爆の子の像へ行きました。そこで最初に、目がとまったのは、沢山の千羽鶴でした。私たちは、それを見て世界中の人たちが訪れ、平和を願っているのだと思いました。その像のモデルとなった佐々木禎子さんは、2歳の時に被爆し、その後元気に成長しました。ですが、11歳になった頃、白血病と診断され入院し折り鶴を千羽折れば、病気が治ると聞いた禎子さんは、薬の包み紙などで鶴を折り続けましたが願いもかなわないまま、12歳の短い生涯を終えたという話を聞きました。その話を聞いているとき、とっても胸が苦しくなるほど悲しかったです。次に被爆したアオギリの木を見ました。熱線と爆風によって焼けえぐられました。その傷跡と人々の心の傷を包むように成長を続けていて、遠い昔の傷跡をなおしてくれる木だと思いました。1945年8月6日午前8時15分に人々の人生が一瞬にして変わりました。その怖さを、私たちは、この目と心で感じてきました。約14万人の人が亡くなってしまいその後も放射線による被害や後障害でたくさんの方が命が原子爆弾によって亡くなってしまいました。その中で生きのこった被爆体験者の方にお話を聞きました。その方は、3歳で被爆したそうです。原爆が落ちた直後「ピカッ」と光って「ドン」と音がして目を開けるととてもシーンとしていて被爆した人たちがスローモーションで歩いているようだったそうです。私は、その方のある一言が心に残っています。「原爆は、大昔の話ではない」これは、まだ日本だけでなく外国で戦争がおこっているということです。だからまだ本当の平和では、ないことが分かりました。では、本当の平和とは、なんでしょう。この世界から戦争や核兵器がなくなることだと思います。戦争がなくなれば怖い思いをする人がいなくなる、核兵器も世界中の人々を苦しめたりしなくなる、そうしたら、平和で安全な未来を作っていけると思います。そして私は、疑問に思ったことがありました。なぜ、原爆が広島に投下されたのかです。その理由は、平和記念資料館で学びました。

広島は当時晴れていたそうです。その「晴れていた」、それだけの理由で約14万人以上の命をうばい、そして苦しめた。私は、そんな話を聞くだけで涙がこぼれそうになります。資料館や原爆ドーム、袋町小学校で見た原爆時から大切に今に残っている資料や写真を見ていると本当に原爆にあった人たちの苦しみや悲しみが伝わってくるような気がしました。例えば、黒い雨を見たとき、初めはそんなに黒くないのではと、思っていたのですが、実際の雨を見てみると墨のように黒くておどろきました。その黒い雨を喉が渴いた人が飲んでその後下痢などでなくなったり、後から禎子さんのように病気が見つかって死んでしまうのを知り、放射線は、とても怖いと思いました。最後に、私たちは、これからの日本を世界を作っていく世代です。そのためには、次の世代に原爆があったこと戦争があったことを語り継がなければなりません。心に大きな傷をおった被爆者からお話を聞くチャンスは、今しかありません。だから私たちが平和のリレーをしなければなりません。私たちでこの世界が良い方向へ進むように、平和のバトンを次の世代へ何十年何百年も忘れないようにつなぎ続けましょう。



核兵器のない世界をめざして

大府西中学校 加藤 駿一

私が広島原爆を知ったのは、小学生の頃「はだしのゲン」という作品を読んだ時です。母も、小学生の頃、映画を見て、その時の映像は、今でも心に残っていると話してくれました。作者の中沢啓治さんも「はだしのゲン」を見たことで、原爆に対して嫌悪感をもってくれるよいと語っています。そして、真実から目をそむけない事が大切と言っています。

私も、本当にこの平和な日本にこんな時代があったのか、正直、信じられませんでした。が、「はだしのゲン」や今回「平和大使」として広島の地を訪れて、真実であったと肌で感じました。

最も印象的であったのは、広島平和記念資料館に展示してあった溶けかけた三輪車です。持ち主の伸一くんは、三輪車が大好きで、原爆投下の当日の朝も乗っていて、被爆して亡くなりました。一瞬にしてまだ小さい伸ちゃんの笑顔が、あっというまに失われてしまいました。

他にも、血がべっとりついた花柄のワンピースや学生服や帽子、8時15分で止まった時計など、苦しみながら死んでいった人達の生きたあかしが残されていました。

とけてくっついたビンのかたまりや、お茶わんなど、とてもあつただろうなと想像しながら見ました。もし、自分や家族がその土地にいたらと思うとおそろしくて言葉にもなりません。

今年も、8月6日に広島の地で平和記念式典がとり行われました。母と妹はその式典に参列したそうです。

その中で印象に残ったのは、広島市長の平和宣言と広島県知事のあいさつだったそうです。

「おとなりさんとは仲が悪いけれど、うちにはおとなりさんの家を破壊するスイッチがあるし、おとなりさんも、うちを破壊するスイッチをもっている。だからお互いスイッチをおさなくてもよいように仲良くするんだよ。」

自分の子どもにこのように今の世界の現状を話すことができるでしょうか。

今、世界には、アメリカ、ロシアをはじめ核を保有している国があり、核兵

器廃絶の道は険しく、今もなお、核の脅威にさらされています。

武器で相手をおどし、一部の政治家の判断で核戦争が起こるかもしれない世界で本当に幸せになれるのでしょうか。

武器のない、安心して平和な世の中を未来の人達へつなぐことが目標ではないのでしょうか。

私が、今できることは、身近な人達に広島と長崎でおこった出来事を伝え、二度と、同じようなことを起こしてはいけないと伝えることです。

そして唯一の被爆国である日本がもっと世界の人たちの先頭に立って核兵器廃絶の険しい道を懸命に歩いていくべきだと思います。「やすらかにおねむり下さい。もう二度とあやまちはくり返しませんから。」と、胸をはって言える日がくることを、願ってやみません。



広島派遣を通して

大府西中学校 坂野 夏月

私たち平和大使は広島に行って、広島記念公園や袋町小学校平和資料館を訪れ、様々なものを見学したり、説明を受けたりしました。また、被爆体験講話もうかがいました。

広島平和記念資料館では、多くのものを見ました。真っ黒なお弁当、焼け焦げた三輪車、ぼろぼろの制服、8時15分で止まった腕時計などの実物から、黒い雨を飲む人たちや、「水、水。」と叫んでいる人たち、きのこ雲や、やけどをした人の絵や写真まで見ました。それらを見るだけで胸が苦しくなったり、怖くなったりしました。

袋町小学校平和資料館ではそのときの校舎が一部残されていて、実際に入ることができました。また、その校舎の壁には当時の壁の写真が実物大で貼ってありました。その壁はすすで真っ黒になっており、家族への伝言や名前が白いチョークでたくさん書いてありました。

広島に落とされた原爆は、一瞬で、建物だけでなく、人々の生活、笑い声までも焼き尽くしました。戦争は終わりました。しかし、戦争は「終わりました。」と、宣言しても終わるものではないのです。原爆から放出された放射線は人の体を突き抜け、仮にその時生き延びたとしても、数年後、数十年後に影響し、症状が現れたり亡くなったりするといいます。今もなお、その症状で苦しみ続ける人たちがいます。

原爆の直後、生き残った人々は大やけどをし、脱水症状の状態でした。人々は川に入ったり、その川の水を飲んだり、空から降ってきた黒い雨を飲んだりしました。しかし、それらには放射性物質が含まれており、飲めば死んでしまうものでした。空気を吸っても、水を飲んでも、降った雨を飲んでも死んでしまうのです。原爆は人々から生きる術を奪い取ってしまう恐ろしいものなのです。また、原爆が落とされた直後はシーンとしていて音が何もしなかったそうです。原爆が落とされたのは朝の8時15分でしたが原爆による煙やすすで空が薄暗くなり、まるで夕方ようだったといいます。しばらくすると爆心地の方から、ゆっくりと手を前に差し出した人の群れが近づいてきたそうです。大

ケガやひどいやけどをしていたり、体中にガラスの破片が突き刺さっていて、まるで幽霊のようだったそうです。

私たちは原爆ドームも見学しました。資料館で見た、原爆ドームの前の姿と見比べてみると、鉄筋の部分を残し、ほとんどがなくなっていました。また、原爆ドームのすぐ横に流れる川にはたくさんの死体が浮き、その川にかかる橋のたもとには、うめき声をあげる人たちがかさなっていたといえます。

そもそも、原爆が落とされた原因は戦争でした。だから、戦争はしてはいけないのです。また、被爆者の方々は「アメリカの人々を憎むのではなく、こんな思いを他の誰にもさせてはいけない。」と切に思っているそうです。そして被爆者の方々がこの悲しい出来事を一生懸命に伝えているのは、その事を根付かせてほしいと思っているからだそうです。

私たちにこのようなお話をしてくださったのは、実際に被爆された高齢の男性でした。私たちは幸いにも、直接その方からお話を聞くことができましたが、この先いつまでも聞けるとはかぎりません。そうなってしまうと、原爆は昔のものとなってしまい風化してしまう心配があります。いま、私たちにできることは核兵器禁止条約への署名をすることや、署名への呼びかけ、そして今回の派遣で学んだことを学校の友達や家族や親戚などの身近な人たちをはじめ、多くの人たちに語り継ぐことだと思うのです。

戦争は、絶対に起こしてはいけません。戦争が絶対に起きない世界をつくっていく。どうしたら戦争をなくせるか。そういったことを考えながら生きていくことが平和につながっていくと思っています。



広島派遣で学んだ事

大府北中学校 式庄 さくら

私は7月27日に大府駅に集合して広島に向かいました。広島に着いてまず人生ではじめて路面電車に乗って原爆ドーム前駅に行きました。初めての路面電車は、たくさん駅があつて何度も止まってすごくおもしろかったです。しばらく電車に乗って原爆ドーム前駅に着きました。原爆ドームに行きました。あの大きな鉄筋の建物が窓も屋根のコンクリートもすべてなくて、被爆前の写真を見てドームを見るとこれが本当に元はこの形だったのかと疑ってしまうほどの姿でした。一通りドームを見た後に禎子さんの平和の子の像を見て資料館へ行きました。1階に企画展示室というものがありました。そこには、焼けてとけた自転車、血が出た所にシミができそのままシワのついた服が残っていました。腕や背中にやけどを負った私よりも少し年上の子供の写真など、怖くて逃げだしたくなるような、目を背けたくなるようなそんな信じなくてはいけない信じられない73年前からそのまま時間が止まった物がたくさん展示されている空間でした。次に被爆者体験談を聞きました。清水弘士さんの話によると、今現在すぐにでも爆発させて人口に影響をあたえる事が出来る核兵器は世界に約4,150発もあり、爆発はしないけど、現在地球上にある核兵器の数は約15,000発もあるそうです。ですが実際に戦争でつかわれた核兵器は、過去を、さかのぼっても広島・長崎の2ヶ所だけだそうです。その2発によって家族や友人など周りの人をたくさん傷付け、亡くしてしまったのに、こんな事が起こるのは、私達だけで終わりにしよう。他のだれにも、こんな思いをさせてはならないと、原爆をおとした国をうらむわけではなく、これからの生活や未来の人々を良くするために、私たちにたくさんの事を教えて下さってとても感動しました。帰りにまた原爆ドームを見ました。昼間とは違って西日のあつたドームを見て、私たちがなにげなくすごしているだけのこの瞬間にもどんどんと時間は進んでいて、原爆が落とされたあの日から少しずつ確かにはなれていっている事を感じ、心の中に私は、こうやって研修して帰っていただけでいいのか。自分の見たものを伝え、他にももっとするべき事、できる事があるんじゃないかと強くおもいました。2日目の大府へ帰る日また、原爆ドームを

見ました。1日目の最初とはまるで見る目が変わって、戦争はしちゃいけないという感情も強まり、絶対にこんな事をくり返してはいけないと思いました。そしてドームを見て、大府に帰ったら小さな力でも何か行動をしようと誓いました。

今回の研修で、戦争をしてはいけないという気持ちは変わらないし、ゆらいでいないけど、その言葉がもつ重さが私の中で何倍にも大きくなりました。戦争についての情報もたくさん取り入れようとするようになりました。たくさんの人と、この言葉の重さを分かち合い平和な世の中をつくりあげたいと思いました。今回、私にこのような貴重な体験、研修をさせていただきありがとうございました。平和な世界を目指す1人として頑張っていきたいです。



広島へ行って学んだこと

大府北中学校 野村 茉莉香

私は、広島派遣事業で原子爆弾の威力や、その恐ろしさを改めて知ることができました。私は今まで「戦争ってどういうことなんだろう」ときかれてもあまりピンときませんでした。ですが、今回「平和」について考えるにあたって、被爆された方のお話をきいたり、たくさんの資料を見たりして、今の私たちの生活がどれほどありがたいものなのかを考えさせられました。

私ははじめ、原子爆弾といってもそこまで威力の大きいものだとは思っていませんでした。しかし資料館で見たのは、約3メートルもの爆弾が空中で炸裂して町中のなにもかもをふき飛ばしたという事実でした。焼け野原になった町の様子や、大火傷を負い皮膚がただれた人や、まっ黒焦げになって死んでしまった人の写真を見て大きな衝撃を受けました。それと同時に、日本人と外国人という違いはあれど「なぜ同じ人間同士で命の奪い合いをしなければならなかったのかな」とも思いました。被爆された方のお話の中には「原子爆弾が投下されたのは日本にも原因がある」という言葉がありました。日本が海外に侵略し、たくさんの人を殺してしまった報復として、大量無差別殺人兵器である原子爆弾の開発が進められてしまったというものでした。原子爆弾は一瞬にして何万人もの命を奪いました。どんな理由があつたとしても、一人一人のかけがえのない命を奪う権利は誰にもないし、決して許されることではありません。

この原子爆弾は、アメリカと日本の力の差を見せつけ、戦争を終わらせるために投下されたとも言われています。人々が活動し始める時間帯に投下されたため、目の前で大切な人を亡くした辛い記憶を抱え、助けられなかったことを悔やみながら生きている方がたくさんいます。たくさんの人が一生懸命考えぬいて生まれた素晴らしい技術や科学の発達は、人々の豊かで幸せな生活に繋げるために使われるべきだと私は思いました。語り部の方から原爆が落とされた当時の話を詳しく聞いて、被爆の実相や命の大切さを学びました。

原爆の被害は爆風や熱線だけではありません。原爆が投下されると同時に大量の放射線が放出されます。その放射線が体を通過してしまうことで細胞が殺され、体に悪影響を与えるのです。目に見えていないため、誰もが防ぐことが

できません。佐々木禎子という女の子は2歳で被爆しましたが、けが一つなく元気に過ごしていました。ですがそこから10年たった12歳で白血病を発症してしまいます。逃げる際に放射線を含んだ黒い雨を浴びたことが原因でした。戦争が終わっても、いつがんなどが発症するかわからない、目に見えない恐ろしさに怯えながら生きていかなければならないのは、はかりしれないほど辛いものだと思います。原子爆弾は、投下されたその時だけでなく、ずっとずっと後までその被害を背負って苦しみながら生きていかなければいけない人がたくさんいるということを知ることができました。

現在、世界中にある核兵器の数はおよそ15,000発で、そのうち今すぐ使うことのできるものはおよそ4,150発もあるそうです。「こんな苦しい思いを他の誰にもさせてはいけない」という考えが少しずつ広まっているものの、まだ核兵器は減っていきません。原爆は決して昔だけのことではないのです。

戦争や原爆が人々にとってどういうものであったのかは、実際に被爆地に赴き、被爆された方のお話に耳をかたむけることで初めて知ることができます。どんな人でも、誰かにとっては大切な人であることを忘れずに、お互いを尊重し、よりよい人間関係を築き上げていくことが重要になってきます。

たくさんの人々の苦しみをこの目で見て知ることのできた、唯一の被爆国である日本から、原爆の恐ろしさや悲惨さ、また自由であること、平和であることの尊さを世界の人々にも伝えていけるようにしたいです。



ヒロシマが教えてくれた僕たちのすべきこと

大府南中学校 城 知希

僕は広島平和記念資料館で見た資料と実際に被爆した方の講話をもとに、平和について考えていきたいと思います。

一つ目は、資料からです。資料館には、被爆した方の持ち物や、8時15分で止まった時計などがありました。また、被爆当時に書かれた手記もありました。それらの中で一番多かった言葉は、「一瞬ピカッと光り、その後ドンと大きな音がした。何が起こったのかよく分からず、茫然としていた。」という言葉です。それを讀んだ僕は、原爆は恐ろしい兵器だということを改めて実感しました。ほんの一瞬で、人の生活を奪う原爆、それは大人から子供までの生きる権利を一度で無くせるほどのものなのです。当時、広島には130万人ぐらいの人が住んでいました。しかし、原爆で約14万人の人が犠牲になったのです。でも、まだ遺骨も発見されていない人が今もいるのです。また、被害は原爆を落とされた瞬間だけ及ぼされるものではありません。そこから放出された放射線に当たって、その数年後や数十年後に白血病やがんなどで亡くなってしまう人もいます。被爆した人は、いつか病気を発症して死んでしまうのではないかという不安を抱きながら一生を過ごさなければならないのです。そんな兵器は、今すぐにでもこの世界中のどこからも無くしてしまふべきだと思います。

二つ目は、被爆者の方の話からです。僕たちが話を聞いたのは、清水弘士さんという方です。原爆が投下されたとき、この方はまだ3歳でした。3歳で被爆したにもかかわらず、清水さんが覚えていることがあるそうです。それは、お母さんが必死になって自分を助けてくれたこと、きのご雲の下に大きな火柱が立ったこと、そしてお父さんを探すために兄とたくさんのがれきの上を歩いたことだそうです。3歳の子でもこんなに苦しい思いをしているのだから、お母さんやお兄さんはもっと苦しい思いをしていたに違いないと思いました。また、お母さんが残してくれた手記によると、川に死体が浮かんでいたり、ガラスのかけらが体にびっしり刺さっている人がいたりして、地獄のような風景だったそうです。たった一発の爆弾で街は地獄絵図になってしまったのです。しかし、その後の人々の助け合いは、とても素晴らしいものでした。広島市民は

自分たちで、道路や橋を復旧したり、廃墟の中にバラックというものを造って、その中で生活をしたりしていました。その力強い地道な努力があったからこそ、今の広島市があるんだと感動しました。

しかし世界では、今でも原爆や水爆の保有国がたくさんあります。今、世界に存在する原爆・水爆の数は約15,000発です。また、今すぐボタンを押せば発射できるものは、約4,150発もあるのです。この量の原爆や水爆が発射されてしまったら、一つの国だけでなく、世界中の国が滅亡してしまうでしょう。そんなことにならないようにしようと、広島や世界の各国では、様々な条約を結び、世界中から核兵器を無くそうという運動が次々と起こっています。僕は、このような運動が世界の核兵器保有国に影響を与えて、一刻でも早く核兵器がなくなれば、広島や長崎で被爆した方のような思いをする人がいなくなると思います。被爆した方々も「こんな思いを他の誰にもさせてはならない。」と、メッセージを残してくれています。この期待にこたえるためにも、私たちのような子供や若者が、原爆がどれだけ残酷で、平和がどれだけ大切なものを被爆者の方から聞き、次の世代に受け継いでいくことが、これからはとても重要だと思います。

「原爆の事実を絶対に風化させてはならない。この苦しみをもう一度繰り返してはならない。」被爆者の方々は、このことをずっと繰り返し言っていました。過去は変えられませんが、未来は変えられるはずです。原爆の被害を受けた国だからこそ分かることはたくさんあります。それを僕たちがこの平和大使に任命されたことをきっかけに、より多くの人に伝えていけるようにがんばりたいです。その「伝える」という動きがこれから先、いつまでも続いて、いつか核兵器のない平和な世界が築けるように、次の世代、また次の世代と「平和の輪」を広げていきたいです。



託された使命

海陽中等教育学校 星野 竜馬

8月6日、広島平和記念式典もこれで73回目を迎える。そんな中、毎年行われている広島市長と市内の小学生の演説に世界中の人々は応えているのだろうか。

実際に広島に行って感じたことの第一に頭に浮かぶのが2つ。一つは、原爆によって数えきれない程の人が苦しんだこと。もう一つは、世界中にある核兵器をなくしていかなければならないことの2つだ。理由は、核兵器を作ったことが人類の大きな過ちだと強く確信したからである。具体的な根拠として、原爆はとても凶悪な存在だということが挙げられる。あの日、広島に落とされた一発の原子爆弾が、無差別に多くの命を奪った。被爆した方の話によると「ピカッと光った次の瞬間、ドンといって家の天井が落ちてきた。外に出ると、あたりは静かで家々は全焼していた。外を歩いている人の皮ははがれて垂れ下がり、血だらけだった。そして、川には人の死体が流れていた。」と言っていた。聞いただけでも身の毛がよだつような話で、実際に見た人からすれば、まさにそこは地獄と変わらない光景に感じられただろう。そしてもう一つ、原爆は生き残った人々の人生も変えた。原爆の主な三つの作用のうちの一つ、放射線は白血病やがんなどの病気をもたらした。あの佐々木禎子さんも白血病で亡くなってしまったうちの一人だ。禎子さんは2歳の時に被爆。元気な子だったらしいが、小学校6年生のときに、白血病と診断される。折り鶴を千羽折れば治ると聞き折り続けたが、願いはかなわず亡くなる。「原爆の子の像」は禎子さんをはじめ、原爆で亡くなった多くの子どもたちを慰霊し、平和を守る記念の像としてつくられた。

被爆した方のお話で「戦争を二度と始めさせてはいけない」という言葉が心に残った。この方は3歳のときに被爆し、原爆によって父を失った。母親一人に育ててもらったようで、戦後の生活は本当に大変だったという。今のよう衣食住が揃っての母親一人と当時とでは圧倒的な差があることは見て取れる。だが、どれだけの苦勞をしたかは、我々では見当がつかない程だろう。

今、世界には約15,000発もの核兵器が存在していると言われてい

その中でも約4, 150発は実戦配備されている。アメリカ、ロシアをはじめとする国では、持っている核兵器の量で他国に威嚇をしたりと、核兵器による、国際社会の緊張が続いている。そんな中、唯一の被爆国である日本も戦争体験者が減り、人々の頭の中から戦争という恐ろしさ、非人道性や悲惨さが風化されつつある。それは決して放置できることではない。日本人は世界で唯一原爆の苦しみ、悲惨さ、そして戦後の苦労を知っている。その知っていることを世界中に広め、後世に語り継ぐことが我々の使命だと思っている。



平和都市宣言文

緑香るにぎわいの中、子どもたちの笑い声が響き、汗流し働く若者の姿や地域で活躍する元気な高齢者の姿が目映るまち、健康都市おおぶ。大府市は、戦争のない平和な社会のもと、健康都市づくりに取り組み、着実な歩みを続けています。

世界の恒久平和は、人類共通の願いであり、日本国憲法の普遍の原理です。しかし、今なお世界各地で、核兵器の保有、テロ行為、武力紛争などの平和を脅かす様々な問題が起きています。

先人から引き継いだかけがえのない平和のバトンを守り、次の世代の子どもたちにしっかりと渡していくことは、今を生きる私たちの果たさなければならない重大な責務です。私たち大府市民は、一人ひとりの命を大切に、核兵器、テロ行為などの脅威のない平和な社会の実現を強く訴えます。

日本国憲法の公布から 70 年目の節目の年に、恒久平和とあらゆる争いのない社会の実現を願い、ここに「平和都市」を宣言します。

平成 28 年 9 月 27 日 大府市



「平和都市宣言」石碑（平成 29 年 9 月 1 日設置）